
グリーンオイルストーリー～空の少年たち～外伝<クリア＝ポーター>

久川智子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーンオイルストーリー〜空の少年たち〜外伝<クレアIIポーター>

【Nコード】

N4228K

【作者名】

久川智子

【あらすじ】

「グリーンオイルストーリー〜空の少年たち〜」の登場人物クレアIIポーターを主人公にした外伝。

グリーンオイルというエネルギー資源をもつ世界。孤児だったクレアは凄惨な運命をたどり、自分が成すべきことを見出し、グリーンオイルをめぐる暗躍したものによって世界が壊れないように戦いに挑む。

クレアの少女時代（前書き）

「グリーンオイルストーリー」空の少年たち」の登場人物クレア
「ポーターを主人公にした外伝。

クレアの少女時代

クレアは7歳の頃、孤児院から不正に人身売買された。

境界線ちかくの山村、人里はなれた一軒家、一人暮らしをする中年男に売られてしまった。

中年男は、足が不自由で車椅子生活だった。

両親はすでに他界しており、他に身寄りも無く、独身だった。

両親が残したわずかな財産で、クレアを買った。

不自由な体での生活を補助させるのと、愛玩具にする目的があった。クレアは、孤児院でおとなしく過ごしていたが、やせ細っていたので、養子にされる機会がなかった。

愛玩具にされるほどの愛嬌のある容姿は持ち合わせておらず、幼くて瘦身のクレアは欲情されずにいた。

奴隷のように、中年男にこき使われて、瘦身のクレアは疲弊したままで、成長しても女性らしい体つきにはならなかった。

クレアが13歳の頃、中年男はクレアに触れることをなけば諦めて、クレアに自分の性器を触れさせて欲情しようとした。

クレアの細くて冷たい手ではいっそう、欲情できずに萎えてしまった。

思い通りにいかない状態で怒りの感情が爆発し、車椅子のまま、クレアを殴ろうとしたそのとき、車椅子が横転し、中年男はうつぶせで床に叩きつけられて、その上に車椅子が倒れてきた。

クレアはすぐに村の人を呼んでこようとしたが、止められた。

電話連絡で人を呼び、クレアは地下室に隠れているように言われた。結果的に腰の骨を折る重傷となった。

中年男はあまりの痛みに耐えかねて、非合法的に痛み止めを手に入れた。クレアに注射をさせていた。

中年男は、クレアに医学書を購入してきて、与え、読むように命令

した。

自分に不都合な本は読ませなかったが、家にあつた辞書を渡しておいた。

クレア自身は、孤児院にもどりたくないのので、中年男の言いなりになつていた。

医学書の本を読んでいると、時間を費やすことができたので、自ら進んで読んでいた。

中年男はそのうち、腰痛のあまりの痛みには耐えかね、モルヒネを手に入れた。

モルヒネを打つと、気持ちよく痛みがひくので、病み付きになつた。クレアは、医学書にあるとおり打ちすぎると死亡することを注意し

たが、中年男は聞かず、打ちすぎて呼吸が止まり、死に至つた。冬になる前だつた。

クレアは、どうしていいかわからずにはいた。中年男以外で家を出入りする人たちとは面識がなかったので、連絡する術を知らなかつた。冬場は、村にいたる道が雪で遮断されるため、一人では村へ行けず、冬籠りに備えて食料は備蓄されていたので、春まで待とうとクレアは考えた。

クレアは手際よく、死んだ中年男の死体を地下室におろし、死体全体を雪で覆つて腐らせないようにした。

それから、医学書を隅々まで読み、一人で生活をしていた。

春がやってくるその前に、一人の中年男がクレアの家を訪ねてきた。

男は道に迷つたので、一晩泊めてほしいと言つた。

その男は、ダン・ポーターだつた。

ダンには、スワン村を目指して、登山しようとしたが、道に迷い、持参した食料もつきてきたので、諦めて下山してきた。

クレアは警戒して、家の中に入れようとしなかつた。

ダンは困り果てて、電話だけでも貸してほしいとお願いをした。

クレアは仕方なく、家の中に入れた。

「お嬢ちゃんが一人でお留守番をしているのかい。」

言葉を発するのが怖くて、クレアはただうなづいただけだった。

ダンが電話をかけ、アレキサンドリア号艦長のゴメスに連絡を取り、迎えにきてもらうこととなった。

時間がかかってしまいそうなので、ダンにはクレアにまたお願いをしようとした。

「わたしの名前はダン。ポーターと言ってね、医者なんだ。

いま、連絡をして、エアジェットで迎えに来てくれるということになったよ。

ただ、天候がよくないのでね、今晚泊めてもらえたいとお願いしたいのだが。」

クレアは口をパクパクさせた。

「言葉が発せないのかな。」

クレアはうなづいてみせて、暖炉のそばにダンの手をひいてつれていった。

暖炉のそばには本や辞書が散乱していた。

ダンがみれば、その一部が医学書であることがわかった。

その本を取り上げてダンは言った。

「これは君が読んでいるのかね。」

クレアはうなづいた。

ダンは、考えた。

（こんな雪深いところに建つ家で、子供を一人にして、置いておく親なんていないだろう。）

「もしかして、君は親がいないのかな。」

クレアはそう言われて、すぐにはうなづけなかった。

本のそばにあったノートと鉛筆をり、出せない言葉を書いていった。

そこには、人身売買の話から、中年男が死に至るまで書き綴った。

ダンは黙読しながら、考えていた。

境界線近くの地域は、黒衣の民族による誘拐や抜け出しが多く、混血児が見つかると人身売買をすることもあった。

クレア自身は赤子の頃、孤児院に預けられた形となっていた様子だが、親が引き取りにこなかった為、人身売買にあったので、混血児の可能性は低かった。

「よくわかったよ。君の名前はクレアだね。言葉が発することができないわけじゃないと思うんだ。」

ダンにはクレアを安心させようと言葉をかけて、中年男の死体がある場所を案内させた。

死体の上にかけていた雪を取り除き、死体が青白い状態になっていて、死にいたるような傷がないか確認した。

ダンはいばらく考え込んだあと、クレアにこう話した。

「クレア、後のことはわたしに任せてくれないかな。悪いようにはしないから。」

不安そうなクレアに対して、ダンは笑顔を見せた。

「この家から君を連れ出そう。そして、君に必要なものをわたしが用意してあげよう。」

君が人間としていくためにはいろいろな苦勞がつきものだけど、わたしがいるから大丈夫。

会ったばかりで、信用してついていくのに、不安があるかもしれないが。

ここで、このまま春を待っていても、良いことが待っているとは限らないだろう。どうかね。」

クレアは深くうなづいた。

ダンには、クレアの返事を確認すると、これから何をするのか、計画的なものをクレアに話した。

ダンはず、吹雪がやまないうちにここから去ることを延べ、それまでに食事をとって吹雪のなかを行く準備をすることにした。

ダンが台所にたつと、そこには、包丁のほかにもメスやピンセットがあることに気づいた。

周りを見渡すと、ウサギの足やら、鹿の足などが吊るされているが、どれも、筋などを切り裂かれて糸状のものがへばりついていていた。ク

レアが台所で食料用の動物を解剖していたことだとダンは無理解した。ダンが食事を作り、レアは防寒着や布などを袋につめていた。食事を終えると、暖炉のそばにあった医学書などを暖炉に投げ込むようにした。

しかし、レアがその様子を見て、ダンを止めた。

「大丈夫。わたしの家にいけば、医学書なんかはたくさんあるのだよ。」

持つて行くには荷物になるから、燃やしていくね。残っていると殺人を犯したように疑われるから。」

レアは、ダンを信じるしかないと思った。

二人は食事を済ますと、地下へ向かい、オイルを撒いた。

玄関口に荷物をまとめて、防寒具を着ると、家を燃やすだんごりをはじめた。

「家を跡形もなく燃やす必要がある。わたしが満遍なくオイルをかけておくから、レアは少しの間我慢して、森の奥で待機してくれないかな。」

レアはうなづいて返事をした。

深夜、吹雪のなか、レアは家をはじめて出るかのように恐る恐る歩みを進め、力強く吹雪に向かって前進していった。

ダンはこの家にあつたペール缶二缶分のオイルを部屋の真ん中に置き、爆弾のように家をふっとばすように仕込んでいた。

ドアを少し開けて、オイルの道筋をつけ、自分が外に出た後、火を放った。

ダンはその場で走り去り、森のそばまで来ると家は吹っ飛んだ。瓦礫と化した家は燃え続けて炎にまみれていた。

その様子をダンは無確認して、レアの待つ森の奥へと向かっていった。

森を抜けると氷の張った湖に出た。

レアとダンは木々のそばで吹雪をしのいだ。

吹雪がやむと、光が差し込み、氷の張った湖がきらきらと輝きだした。

上空にアレキサンダー号というダンの友人ゴメス・スタンドフィールド艦長の空挺が飛行しており、そこから一機、エアード力の機体が降りてきた。

二人がアレキサンダー号に搭乗すると、空挺は、その場から去るようにして、飛行した。

ダンの後をついて行くクレアは、目を見開いて、空挺内を見渡した。見るものすべてが、初めての体験だった。

空を飛ぶことでさえ、不思議に思い、目が開けられなかつたくらいだった。

空挺内に用意されているダンの部屋があつて、そこにクレアはいることとなった。

ダンはその隣の診療室みたいな部屋で過ごすこととした。

荷物をあらかた、整理しなおしてから、ダンはクレアを連れて、操縦室に向かった。

そこには、艦長のゴメスほか、クルーが何人かいた。

「ゴメス、世話になってすまない。」

「かまわないよ、ダン。その子かい、連れて帰ると言つてた女の子は。」

「ああ、クレアという名前の女の子なんだが、今は口が聞けないらしい。」

ダンはクレアを前に来るよう指示をした。

「クレア、こちらがこのアレキサンダー号の艦長で、ゴメス・スタンドフィールドという人だ。」

クレアは頭を下げた。

「はじめまして、よろしくな。年はいくつかな。」

クレアは右手で人差し指を出し、左手で三本指を出した。

「13歳かい。それにしても体が小さいね。」

「ゴメス、それはないだろう。お宅のフレッドやディゴと比べたら、

そりゃ、小さいもんだよ、女の子は。」

「そうかなあ。ジゼルは8歳だが、同じくらいの背の高さだと思っただがな。」

「ジゼルか。たしかにそうだな。」

ダンは、クレアのほうをしみじみとみていた。

「私の家に来たら、栄養価の高いものを食べさせてあげるよ。」

ダンにはクレアの頭をなでた。

クレアは部屋に戻ると、服を脱いで、自分の体を眺めていた。

やせ細っているのは自覚できるが、体の大きさは、他の子供たちをみたことがなかったので比べ様がなく、わからなかった。

当時の空艇には大人ばかりが乗っていたので、クレアは大人しくしていた。

アレキサンダー号は、スタンドフィールド・ドックへの帰還を目指して飛行していった。

クレアはドックへの帰還後、ダンの診療所で暮らすことになったが、ダンにはクレアが診療所で暮らすのに住居を手入れしなければいけないと思ひ、しばらくドックで預かってもらうことにした。

当初のスタンドフィールド・ドックでのクレアの印象は、大人しくて物静かな女の子だった。

しかし、それは、クレアがフレッドやデイゴと同じ年齢だったため慣れてしまうと本性が出てきて、学校へ登校するようになると印象が180度変わっていった。

クレアのドックでの生活は、集団生活での規則やコミュニケーションのとり方などを学ぶ良い機会だった。

幼い頃、孤児院で生活していたものの、それは同じ境遇の子供たちと強制的に暮らしていたことに過ぎず、人身売買にあつてからは奴隷のような生活をしてきたので、人とどう接していいのかわからなかった。

クレアがまともな口が利けるようになったのは、ゴメスの後妻マー

サのおかげだった。母親という存在すら知らなかったクレアに、マ
ーサはことあるごとに言葉をかけて、違和感なく体に触れてはスキ
ンシップをとっていた。

ゴメスの前妻の子、フレッドとロブは、マーサにこころを許しては
いたが甘えることはしてなかった。ロブは自分よりクレアが大事に
されている様子をみて、やきもちをやき、クレアにちよっかいを出
すことがあった。ロブは同じ年のジゼルに比べると背丈は低かつた
が、クレアとは同じくらいの背丈なので負けるとは思っていないかつ
た。が、しかし、いきなり、クレアの肩を手で押して喧嘩を売ると、
クレアも相手をしないわけにいかず、片手でロブの頭を押さえつけ
た。ロブが両手でクレアの腕をとって頭から離そうとしても離れな
かった。剥きになって、足で蹴ろうとしたが、クレアは押さええた口
ブの頭を押し込んで、床に倒れさせた。その力にロブは驚き、しり
もちをついた。クレアは見た目こそ痩身で力が無いように見えるが、
握力がかなりあった。しりもちをついたロブに手を差し出し、立ち上
がらせた。そのときの力の勢いにも驚いた。

「体は小さいかもしれないが、腕の力は自信がある。フレッドやデ
イゴ相手じゃ、ひとたまりもないけど、あんたには負けないからね
」
クレアにそういわれたロブは眉間にしわを寄せた。納得ができない
様子なのだとクレアは理解して、ロブがちよっかいを出してきても
相手にしなかった。

共同生活においては、食堂でマーサの手伝いをロブとジゼルとでし
ていた。ジゼルは両親ともドック育ちで、両親は島の畑で農作
業をしていた。その農作物でドックのクルーたちの食事を補ってい
た。

仕事を終え、食事を終えると、クレアはジゼルと入浴することがほ
とんどだった。

はじめて、二人で入浴したとき、8歳のジゼルと13歳のクレアと
の体つきが変わらないことにクレアは愕然とした。

「クレアは初潮がはじまっているの？」

クレアはジゼルの言葉にも愕然とした。

「突然、なにを言い出すのよ。」

孤児院のころには同性と接しても会話することがなかったからだ。

「生理のことは知っているでしょ。」

クレアはジゼルの言いたいことを把握しようと努力してみることができた。

「もちろん。」

「わたしはまだだけど、学校じゃそんな話ばかりよ。」

「そうなのか。なんか嫌だ。他の子達と一緒に行動するとは。」

「いじめられても、フレッドとデイゴがいてるから大丈夫。」

「あたしは誰かに守られたいって思わないから。」

「ふうう〜ん。」

「あの二人と同じクラスになっちゃうんだな。」

「そうだね。」

ジゼルはおませな女の子なんだとクレアは思った。

クレアは医術の書物以外に好奇心で女の子が主人公の物語など読んでみたことがあったから、その主人公とジゼルを重ねて考えてみていた。

クレアがスタンドフィールドドックの集団生活を終え、ダンが経営するタイディン診療所に住むようになると、クレアはダンの養女になった。ダンの助手感覚で診療所では手伝いをしていた。

クレアが学校に登校するようになると、周囲の反応は予想どおりだった。

黒髪のクレアは、黒衣の民族の混血児と思われがちだった。

特徴的に見分けがつくのは青い目なのだが、クレアの目は細いため、判断されにくかった。

そして、案の定、クレアは苛められるようになった。

最初は誤解されているのだろうと、相手にしなかったクレアだった。

が、そのうち、暴力を振るわれるようになった。デイゴやフレッドが見かねて手助けしようとしたが、かえってクレアはむきになり、デイゴやフレッドと距離をとって接し、苛める相手と喧嘩するようになった。それは次第にエスカレートするようになり、クレア自身は自分が女の子であることを自覚してて暴力を振るう男子に勝てないことに劣等感を抱き始めた。

この劣等感を解消するには、体力では負けてしまうので、防御する方法を身につけなければいけないと考えていた。

クレアが考えて行動したのは、デイゴやフレッドに格闘の仕方を教わったことだった。彼らとて、格闘の仕方がわかるわけではなかったが、日ごろから、シャドウボクシングなどしていたので、トレーニングから教え込み、対人戦に対応できるようにデイゴやフレッドがクレアの相手をして特訓をしていた。

男子と違って体力がない分消耗しない動きや相手との距離をとって攻撃するやり方、攻撃力が弱い分効果的なやり方などからだで覚えていった。

そして、クレアは、握力特化で長い脚を効果的使うやり方で、男子生徒とやりあい、勝つことでいじめられなくなった。女子生徒からは陰険ないじめが多少あったものの、男子生徒に勝つことでいじめられなくなった。

クレアは中等科を卒業すると、医療学園都市にある医療技術高等学校へ進学することになった。診療所からは通えないので、ダンの親友が医療学園都市で医者をして住まいをもっているのです、そこへ下宿させてもらうこととなった。

マーク・テレンスとミランダ・テレンス夫妻は、子供がいないが中睦まじい夫婦だった。

医者になるために 前編（前書き）

「グリーンオイルストーリー」空の少年たち」の登場人物クレア
「ポーターを主人公にした外伝。」

クレアはダン・ポーターの養女となり、医者を目指して勉強に励む
のだった。

医者になるために 前編

マークは医療学園都市の医科大学病院で勤務する医者で、ミランダは小児科病院の看護師だった。

ふたりはたびたび、医学生を受け入れてきたが、男子ばかりだった。少数の女子生徒は寮に入ることが多かったのだが、ミランダ願望の女子学生・クレアを受け入れることができて、大喜びしていた。

一方、クレアはミランダの屈託のない接し方や愛情表現に辟易していて、1ヶ月もしないうちから、遠ざけるようにしていた。

ミランダは避けられていることに気づかないままに過ごし、気づいていて不憫に思っていたマークはただ波風立たないようにと祈りばかりだった。

医療技術高等学校は5年生制度で、1回生2回生には夏期休暇が普通にあつた。3回生以降からは課題や研修があつて、夏期休暇は名ばかりになっていた。

クレアは1回生の夏期休暇をスタンドフィールドドックで過ごすことに決めていた。

その旨、マークには話していたが、ミランダはクレアとリゾート地に旅行へ行こうと考えていて、ひと波乱あつた。

クレアは5年もテレンス家でお世話にならなくてはいけないので、トラブルは起したくなかつたのだが、ミランダの母親気取りが鼻について我慢できなくなっていた。

そして、クレアはミランダに言ってしまった。

「あなたはわたしの母親じゃないんですから。休暇の予定まで決めてしまわないでください。」

休日、ふたりでショッピングに行くことを楽しみにしていたミランダだったが、クレアは勉強があるからと部屋にとじこもって、ミランダと出かけようとしなかった。

休暇がくれば、ふたりでお出かけできると決めつけて考えていただ

けにミランダは悲しく思った。

「ご、ごめんさい。わたしったら、女の子を預かることがうれしくてたまらなくて……。」

クレアはその言葉を受けて、敢えてこう続けた。

「わたしは医療技術を身につけるために医療学園都市に来たのです。勉強する環境が維持できない状態であれば、これ以上ここにはいられません。」

ミランダは目に涙をためてこぼした。

クレアはそれでも、ミランダを凝視していて、態度を改めようとしなかった。

そんな様子にマークは耐えられなかった。

「私が悪かったんだ。ちゃんとミランダに話しができていなかった。ここは私に免じて、許してもらえないかな、クレア。」

クレアはマークから引き下がれるように促されたと思い、だまっとうなづいた。

「ごめんなさい。クレア。わたしはあなたと仲良くしていきたいわ。どうしたら、できるのかしら。せめて、お話だけでもしたいの。」

クレアは、眉間にしわを寄せて、お話だけでもって会話ならご主人のマークとすればいいのと思っていた。

「クレア、ミランダは母親気分を味わいたいかじゃないんだ。家族のように会話がしたいんだ。」

男の私とできない話しだつてあるだろう。」

マークがミランダの助け舟をだしたつもりだったが、クレアは押し黙って、黒目を一方に寄せて、目を合わせないようにしていた。

「いいわ、クレア。無理には言わない。しつこいようなことはないから、聞かれたことは話してちょうだい。お願いだから。」

ミランダは涙を拭いて、クレアに懇願した。

（いままでだった、世間話ぐらいしたのに。なにが不満だつていうの。普通の女の子みたいにおしゃべりなんてできない。）
クレアは黙ったまま、思っていた。

そして、顔を上にあげて、首を手当て、言葉にできないもどかさというしぐさをした。

「まあ、今すぐには行かないだろう。夏期休暇はスタンドフィールドドックで身につけたいことがあるのだろう。」

もどつてから、その土産話でも聞かせてくれればいい。そこからはじめよう。」

マークの言葉に、クレアは腕を組んでうなづいて見せた。

なんて面倒なとクレアは思ったが、口にだせばもつと面倒なことになるだろうと言わなかった。

クレアがスタンドフィールドドックにいつている間、テレンス夫妻は二人だけでリゾート地でバカンスを過ごした。

クレアはスタンドフィールドで、エアジェットに乗れるようにしたかった。

義父のダンがそうであったように、エアジェットで急患が出ても駆けつけていけるようになりたかったからだ。

ドックではマーサがいて、クレアにとって彼女の存在がいまさらながら、大きく感じた。

ミランダのように、存在をアピールされるのではなくて、距離をとりつつ、さりげなくスキンシップをとってくれて、肝心なときにアドバイスをしてくれる。

マーサはジゼルを娘のように可愛がっていたが、自分の子供ではないことを意識していたので、クレアにも自然と同じように接することが出来たのだろう。

エアジェットに乗れるようになると、ロブが負けたくない一心で、競争をもちかけられることがたびあった。

しかし、ロブの父ゴメスが快く思わないことを知っていたので、ロブの挑発には乗らなかつた。

そんな、ある日、グリーンエメラルダ号がドックに着岸した。

艦長のハートランド准将が軍の管轄下にある空挺を私物化している

ために、気まぐれに飛行し、クルーには軍人以外の人間を加えていた。

准将の姪レテシアがその人間のうちのひとりだった。また、レテシアの兄ガルシアがいてスカイロード上官育成学校卒業生の少尉で、クレアより5歳年上で、目は妹のレテシアに似ていて大きくて澄んでいて、容姿は中肉中背の美青年だった。

グリーンエメラルダ号が着岸した後、クレアはフレッドやデイゴたちと一緒に空挺を見に行った。

フレッドとデイゴが、ガルシアをみつけ、挨拶をしていた。何度かドックに来ていたので、顔見知りだった。

フレッドがガルシアにクレアを紹介した。

「ダン・ポーター先生の養女になったクレアだよ。医療技術高等学校で医者になるために勉強しているんだよ。」

「はじめまして、クレア。僕はガルシアだ。よろしくね。女医さんで、あまり見かけないから、大変だろうけどがんばってね。」

クレアがガルシアに初めて会った時、意識しすぎて、なにも言葉にできなかった。

ガルシアのさわやかな笑顔に差し出された手に握手することもできなかった。

そんな様子に戸惑っていたガルシアだったが、フレッドのそばにいたロブに気がついた。

ロブはグリーンエメラルダ号に向かって手を振っていたのだ。

ガルシアがロブをみているのをフレッドは気がついて、ロブをガルシアに紹介した。

「ガルシアはロブと会うのは初めてだったな。」

ロブはフレッドのその言葉に、手を振るのをやめて、フレッドの方を向きなおした。

「ロブ……。ああ、フレッドの弟だね。」

「そうだ。俺の弟のロブだ。」

ロブ、こちらがグリーンエメラルダ号のハートランド艦長の甥でガ

ルシア「ハートランド少尉だ。」

「初めまして。」

ロブはフレッドに紹介されて、頭を少し下げて挨拶をした。

「初めまして。しかし、ほんとゴメスさんやフレッドに似てないんだね。でも、いい目してるね。」

飛行士の目だ。キラキラしてる。」

ガルシアは苦笑いしたかと思うと、ロブの目をみて、妹のレテシアの目を重ねて見ていた。

ロブは照れくさそうにしてフレッドの後ろに隠れた。

そして、ロブはグリーンエメラルダ号を指差した。

「あそこにいる女の子は誰なの？」

その場にいた人間がいつせいにロブの指した方をみた。

エメラルダグリーン号にいくつかの窓があり、そのうちのひとつに女の子が窓に両手をつけてみていた。

「ああ、妹のレテシアだよ。艦長から空挺から出ちゃいけないって言われたんだ。」

ガルシアはいつものことだからという風に言った。

「あの女の子なんだ、さつき、背面飛行していた。」

ロブがそういうと、周りの人間が驚いた。

「ええええ!!」

ガルシアは顔色変えずにこう言った。

「だから、叔父さんに出ちゃいけないって言われたんだ。仕方ない子だな。」

「背面飛行を平気でやる子なのか。」

フレッドがガルシアに聞いたが、空を飛ぶのが好きで、四六時中飛んでいたら、背面飛行ができるようになったと言われた。

ロブはレテシアがいる窓をずっと見ていた。

「ねえ、あの女の子、ほっぺが真っ赤になっているよ。」

ロブが言った言葉に、ガルシアは怒りをあらわにした。

「叔父さん、酷いな。なんにも女の子の顔を殴らなくてもいいじゃないな

いか。」

フレッドがガルシアの様子をみて、クレアに言った。

「クレア、悪いが父さんに許可をもらって、グリーンエメラルダ号にいてるレテシアの手当てをしてやってくれないかな。」

クレアは、造作もないと即答して、その場から立ち去ろうとした。

「クレア、すまない。よろしく頼むよ。」

冴えない笑顔でガルシアはクレアに言ったが、クレアは目を閉じて軽く会釈する程度で返した。

先ほどから落ち着きない様子のロブがクレアのあとについて回ったが、クレアがゴメスに話をして乗り込もうとしていてあとにつづくロブをゴメスが捕まえた。

「お前は行かなくていい。」

拍子抜けをくらったロブはそこで不機嫌そうに引き下がった。

クレアはその様子をみて、思った。

(こいつ、レテシアに会いたいのか。)

ゴメスはロブがレテシアを気にしている理由を知っていた。

レテシアの背面飛行にここを奪われているのを知っていたからだ。まだ、子供だからとゴメスにはそれ以上詮索することはなかったが、下手にグリーンエメラルダ号でうろつるされても困ると思っていたからだ。

クレアがレテシアに会いに行ったとき、レテシアは頬に濡れた夕オロを当てていた。

レテシアは栗色の髪がウェーブがかかっている腰の辺りまであり、白い肌が紅潮していて、目頭には泣いた後があった。

大きな澄んだ瞳がガルシアの妹であると照明しているかのようだった。

「あんたが、レテシアかい。」

レテシアは声のする方へ顔を向けると、そこに黒髪眼鏡をかけた痩身の女性が立っているの知った。

「そうですけど、あなたは？」

「あたしは、クレア・ポーター。医療技術高等学校の生徒なんだ。ちよつと顔を見せてもらつていいかな。」

レテシアは濡れたタオルを頬から放して、お辞儀をした。

クレアはレテシアの顎に手をあて、左右に動かした。

「口をあけて見て。」

レテシアが口を大きくあけると、腫れている右側の奥をクレアは覗き込んだ。

「口の中が切れていて血が出ている。口内をうがい薬で洗い流して、ばい菌が入らないようにしなさい。」

レテシアは口をあけたまま、はいと返事をした。

「こういうことは幾度もあるわけ？」

クレアは口を閉じて、しばらく考え込んだ。

「してはいけないと言われた事をすれば、殴られるのはわかっていたから、わたしが悪いの。」

クレアはため息をついた。レテシアはクレアのその様子に不思議そうに見ていた。

「レテシア、あたしの聞きたいことはそういうことじゃないんだ。

スタンドフィールド・ドックの責任者であるゴメスはよく息子を殴ることがあるけどさ、それは男の子だから、いいんだよ。

あんたは、女の子だ。殴るにしても、顔を殴っちゃいけない。」

レテシアの大きな瞳が潤んでくると、粒となって滴り落ちた。

(オイオイ、すぐ泣くのかよ。)

クレアは、右手を頭に抱えた。

「艦長は言うの。じゃじゃ馬娘を野放しにしてきた以上、もう甘やかしてはいられない。」

言うことが聞けないのなら、殴るしかないって。」

涙ながらにレテシアは言った。

このとき、クレアは自分がなぜレテシアのところへ行くようフレッドに言われたのか、理解していなかったことに気がついた。

「ただ、空を好きなように飛んでいたかっただけなんだけど、つい、

やってしまったって・・・。」

クレアは腕組みをして、考えた。

医者になるといつても、ただ患者の治療をするだけが医者じゃないんだと。

「お兄さんが心配していたよ。顔を殴らなくてもいいのにな。もう、殴られるようなことはしないよね。」

レテシアは黙ってうなづいた。

「ドックに来たのは初めてなのかな。」

「はい。」

「腫れが引いたら、ドックの食堂においで。甘いものは好きかい？」

「ええ。」

「ゴメスの奥さんマーサがドーナッツを作ってくれるから、一緒に食べよう。」

「はい。」

レテシアは元気良く返事をした。泣いていた顔から笑顔へと変わってきて、クレアは安心した。

「あ、でも、艦長から・・・。」

「艦長にはあたしから、お願いしておくから、心配いらないよ。」

クレアはそういうと、レテシアがいた部屋から出て行った。

クレアは、すこし、ミランダの事を考えた。ミランダは看護士だし、子供が入院している病院に勤務していて、笑顔を絶やさず安心させる心のケアをしていかなければいけない。

クレアはもどいたら、ミランダに謝ろうと思った。

クレアは食堂にいき、マーサにレテシアのことを話した。

マーサはすぐにドーナッツづくりを始めて、ジゼルも手伝いをした。食堂に、ロブたちが集まってくると、ある程度類の腫れが引いたレテシアがガルシアと一緒に食堂にあらわれた。

マーサが作ったドーナッツをみんなで食した。

ロブはレテシアにへばりついて、背面飛行の話とか聞き入ってい

た。

クレアはそのロブの様子を遠めで見ながら、思った。

（ロブがレテシアの気を惹こうとしたなら、ゴメスおじさんはどうするかな。）

クレアはフレッドの方をみて、ロブの様子をどう思っているか聞こうかとおもったが、クレアの視界にガルシアが入ってきた。

ガルシアはレテシアが嬉しそうにロブと会話する姿を微笑みのまなざしで見ていた。

兄としても、妹が悲しんでいるより楽しそうにしている方がいいのだろう。

だったら、フレッドも同じ事を考えているだろうとクレアは思った。ロブとレテシアの様子をほほえましく思っているフレッドとガルシアは、ふたりの姿を長くは見守ってはいられなかった。

ガルシアはその後、グリーンエメラルダ号からホーネットクルーに移動になり、他国の襲撃を受けて戦線に向かった時に戦死した。

フレッドは、父ゴメスの死後、アレキサンダー号の艦長として飛行した際、黒衣の民族の襲撃にあい、亡くなった。

ガルシアの戦死は、レテシアがスカイロード上官育成学校に入る前のことで、クレアがその訃報を聞いたのは、2回生の夏期休暇で、二人に初めて会った時から1年後のことだった。

医者になるために 後編

クレアはダンの胸元で泣き崩れていた。

「義父さん、医術を身につけて病気や怪我から人を救うことができたとしても、救えない命があるなんて、耐えられない。」

ガルシア「ハートランド大尉が戦死した。クレアはそのことを受け入れることがなかなかできなかった。

レテシアと同じく、澄んだ大きな目でクレアを見つめ、笑顔を絶やさなかった青年。

クレアにとっては初恋だったかもしれないが、意識できていなかった。

人の命の儂さを理解していても、いざ親しい人が亡くなっていくと、耐え難いものがあつた。

ダンは瘦身のクレアを抱きしめて、涙をこらえさせた。

「ガルシアは軍人だ。国を守るために戦い、命を落とすことは覚悟していたはず。」

軍人が死んでいってことではない。命を惜しむことで、多くのひとが死ぬことになるというのを教わってきたからだ。

俺たちが、救えなかった患者やけが人を看取らなければならぬ虚しさは、もっと多くの人の命を救うのだという気力に変えていかなければならない。

ガルシアの死を無駄にしないように、クレアの胸中に閉まっておくんだ。」

クレアはダンの抱きしめる力強さに千切れそうになる思いを押し固めてくれているように感じていた。

自分の未熟さを痛感して、もっと強くならなければならぬと、決意を新たにした。

ダンはクレアに言った。

「今はいい。学生だし、10代だし、焦らずに強くなっていけばいい。」

い。焦つても空回りするだけだからな。

お前は芯の強い子だ。弱さは恥ずかしいことじゃない。人間である証拠だ。弱さを自覚して、人の弱さに対処できる人間になるんだ。それこそが本当に強い人間なんだ。」

クレアは、自分がダンの養女になったことに心の底から感謝した。

クレアは3回生になって、夏期休暇を山岳警備隊の救助活動に研修生として任務に就いて過ごした。

クレア自身は診療所の医者を目指しているわけではなく、救急救命の医療に従事する医者を目指していた。

軍医という道筋も考えたが、自分の命が危険さらされることに恐怖しないにしても、早世してしまつてはそれまでに努力してきたこと、ダンから期待されてきたことに応えていくことができないと考えたからだ。

クレアは4回生になるまで、勉学に医療技術の習得に充実した日々を過ごしていた。

しかし、そんなクレアに不遇の試練が待っていた。

学年での女子学生が減つていき、クレアは紅一点となった。

ただでさえ、協調性が無く、周囲の人間とコミュニケーションがうまくいかないのに、クレアは女子学生が減つていることに気がついても原因が何であるかわからなかった。

クレアは勉学の面での理論や形式などは劣っていたが、技術面や医療用語などは優秀で、周囲から疎まれていた。

それは学校へはじめていったころにあった虐めと違って、陰湿的なものに嫉妬心が加わつた状態になっていると感じていた。

クラスの中で、一人の男子生徒だけがクレアと交友関係を保つていた。

ポール・ギャラガンは医者の子息ではあるが、育ちが地方出身者だったので、温厚だった。

勉強熱心ではあるが、競争心や闘争心が無く、周囲となじめないで

いたので、クレアと仲良くしていた様子だった。

クレアはポールと一緒にいてることはわざわざわしいとは思っていなかったが、自分と一緒にでは何かと都合が悪いのではと気遣っていた。経済成長都市で外科病院を営んでいる医者を持つ男子学生がひとりいて、クレアの事を妬んでいた。

成績は決して悪くはなかったが、外科手術の技術にはいつもクレアに負けていた。

クレアを屈服させることだけを考えるようになって、その男子学生はある手段に出た。

クレアを強姦することだった。仲間4人と組んで陥れようとしていた。

彼らは短絡的な作戦では、クレアを拘束することができないでいた。クレアは山岳警備隊の隊員から武術習得の本をもらい受け、日々習得のために鍛錬をしていた。

大の男が寄つてたかつて、クレアには敵わなかったのだ。妙な暴力沙汰に巻き込まれていて回避していたものの、様子がおかしいのはクレア自身も何かあると感じてはいた。

そして、男子学生の姑息な考えに、ポールが巻き込まれることとなった。

ポールはクレアを妬んでいる男子学生とその仲間を監禁され、クレアを呼び出すよう命令された。

クレアは自分の予感的中したと感じ、ポールを助け出そうとひとりで彼らのところへ行ってしまった。

彼らはポールを人質に、クレアの拘束に成功し、クレアを蹂躪した。彼らは、これで、クレアが退学をして、医療学園都市から去るだろうと思っていたのだ。

しかし、クレアの医者になるという決意はゆるぎないものだった。クレアを蹂躪して彼らが去ると、ポールが青い顔をして、クレアを介抱しようとした。

クレアは傷ついたところからだを引きずって、ポールに言った。

「マドレーチエスプレンド病院へ行つて。」

医療学園都市内にあるその病院には義父のダンが学生時代に親友として交流のあつた女医がいてた。病院に着くと、真夜中だったが、女医を呼び出し、事情を説明してレイプキットと手当てを受けた。

膣は炎症し、至るところに暴行の痣があつた。顔も殴られており、鼻が骨折していた。

クレアは女医から、警察に届ける出るよう進められたが、断り、強姦された証拠の書類を作ってもらい、あとは口外しないようお願いして病院を出た。

ポールには、何事もなかつたように振舞うよう言ったが、しばらくの間は学校へ登校できなかった。

クレアは復習を果たそうとした。たったひとりで。

クレアはまず、仲間のひとりで気の弱そうな男を捕らえて、他の仲間の名を聞きだした。

そして、ひとりひとり捕まえては監禁した。

医療学園都市の端の地域では、廃墟となつた診療所が存在していて、監禁場所につつつけだつた。

ひとりひとり、個別に捕らえ、最後に首謀者を捕まえた。

首謀者の男子学生を捕らえると、全身麻酔で眠らせて診察台の上に乗せた。

他の仲間4人は鉄の椅子に手足を拘束して、猿轡をして、目には閉じると刺激が走る目薬を指した。

「諸君、わたしはこれから、諸君のために、外科手術の授業を行う。よく見たまえ。これが外科手術の身技だ。」

4人は最初何が始まるのかと考えて、クレアがメスを手にした時に、首謀者の男子学生を切り刻むのだと驚愕したが、目を閉じることはできなかつた。

男子学生の右手の甲を上にして、手首あたりから、1センチほど切つた。

生理的食塩水を使い、切り口を洗い流した。
ピンセットで中に差込み、より分けていた。

そして目当て物を見つけると、手術はさみを差し込んで、なにかを切った。

ピンセットでそれを引つ張り出した。

4人のうち、ひとりがガタガタと体を揺らし、うめき声を上げた。
それが何であるのか、わかった様子だった。

他の3人はその一人の様子に怯えていたものの、よくわかっていなかった。

クレアはピンセットでそれを4人のひとりひとりの目の前に持って
いって見せた。

「これがわたしの身技だよ。なにかわかるかな。」
うめき声を上げた男は目が閉じられないので、首をねじって見ない
ようにした。

「きみはこれになにかわかるんだねえ。」
それはピンセットでつまんではいたものの、いまにもするりと抜け
て落ちそうだった。

その系のようなものは、右手人差し指の神経だった。
抜き取ったということは、その指は二度と動かすことはできないの
だ。

外科医にとって、致命傷だった。

クレアがそれがなんであるか、説明すると、4人はうめき声を上げ
て、ガタガタと体を揺らした。

「うるさいなあ。君たちに同じ事をするつもりはないよ。
でも、これで外科医になろうなんて、思わないよね。クスッ」
クレアは4人それぞれに麻酔を打って、眠らせた。

首謀者の手首の切り口を縫い終わって、神経を試験管に入れて、手
に持たせて、寮のそばにある公園に4人ともども、放置した。

事件の真相は誰にも知られることなく、5人はその後、学校を退学
した。

事件の噂は都市伝説のようになっていた。真実を知らないものが口伝していったのだ。

ポール・ギアラガンはその状態が耐えられず、クレアの下宿先になっっているマーク・テレンス医師に知っている事をすべて話した。

マーク自身も、ダンの親友である女医と親交があったので、彼女の知っている事をすべて話してもらった。

マークは憤ったものの、クレアの様子に感づかなかった自分に腹を立てた。

そして、クレアに問い詰めた。ミランダがない時を見計らってだ。

「クレア、話はポール・ギアラガンから聞いた。なぜ相談してくれなかった。おまえにとって俺は信用が置けない人間だったか。」

クレアは面倒なことになったと思った。

ポール・ギアラガンが黙っていられるわけもないかと考えてもみた。

「迷惑掛けたくなかったんだ。」

「迷惑かける！そんなこと、どうだっていい。預かっている以上、お前の身に何かあったときにはダンに申し訳がなくて仕方がない。」

マークは憤っていて、クレアを責めているようになっていて自分に気がついて、冷静になろうとした。

（クレアを非難してどうするんだ。）

マークは自分が得た話しが真実かどうか、クレアに確認をした。

マーク自身、口に出して問うのも捗捗しくないのに、いらだちながら話すのに対して、クレアは淡々と返事をしていった。

マークはこの重大さをクレアは感じていないと思った。

「クレア、復讐することに意味があると思っているのか。」

「思っていないよ。これは、他の女子学生が被害者にならないためのもの。」

都市伝説として、学生に恐怖を与える必要があると思ったから。」

マークは頭を抱えた。クレアを説き伏せることは出来ないのかと諦めかけた。

（言いたいことは、そういうことじゃない。言いたいなにか。）

「クレア、俺が心配しているのは、お前のやったことで業を背負うことだ。」

「業？」

「ああ。罪を犯したものには罰せられる刑法がある。しかし、お前は犯罪者たちを罰するべく警察に被害届けを出さずに、自らの手を下して裁いた。」

マークにはクレアがマークの話半分をしかきいていない態度にみえた。

「そういうことをした以上、目には見えない宿業って奴をお前が背負うことになる。お前のなかに濁ったものがこころにできてしまい、お前を陥れる手助けをするんだ。」

「それは、あたしを人身売買で買った男が惨めな死に方をしたというのが宿業だと言いたいなの？」

マークは、ハツとした。クレアの生い立ちをダンから聞いていたからだ。

「ああ。」

マークは消極的に返事をした。

クレアは顔を次第に赤くして、力強く叫んだ。

「だったら、その宿業を背負ってやるよ！そんなことを怖がって、医者になんかなれるもんか。」

「勘違いするな、クレア。医者は人の命を助けるんだ。」

「あたしは人の命を助けるだけのために医者になるんじゃない。理不尽な暴力に屈服させられない世界にするために、その手段として医者になるんだ。」

マークは驚いた。ダンからは生きるために医療を身につけようとしていると聞いていたからだ。

「わたしはここ数年で、変化してきている。ただ単に命を助けるだけの医者になろうとは思っていない。」

医者になって病気や怪我から人を救うことができたとしても、救えない命がある。理不尽な暴力で命を失う世界がある。

そんな世界をなくすために、濁ったものがこころにできたとしても、わたしは医者になる。宿業を怖がっていたんじゃ、多くの人の命なんて救えない。」

マークはクレアの意思の大きさを感じた。

ダン自身も、子供がない寂しさを、クレアで埋めようとしたところもあつたが、そういう親のエゴみたいなものでクレアを束縛できないようなことは口にしていた。

マークはダンが感じていたことの意味を今知ったような気がした。

「もう、何も言わない。ただ、ひとりで背負い込むな。迷惑だなんて思わないから。」

何も相談できないのなら、せめて、お前を娘のように思って、無事であることだけを祈らせてくれ。」

マークは思いつくだけのことを口にした。

クレアは、ただ、「ごめんなさい。」と謝った。

その後、女医が作成した強姦証明の書類を見てしまった看護師がミランダ・テレンスの知り合いにいて、ミランダにしゃべってしまった。

ミランダはこの顛末を女医から聞きだし、マークを非難した。

マークはただ、ミランダに謝ることしかしなかった。

クレアとは話がついているとも伝えた。

「俺たちにはクレアのこころの領域に踏み入ることはできないんだ。彼女が決めた自分の人生に俺たちは口出しできないんだ。」

マークはそう言って、ミランダを説き伏せた。

ミランダはクレアが学校から戻ってきた時に、だまって抱きしめた。

「ごめんなさい。気がついてあげなくて。」

クレアはだまって、ミランダに抱きしめられたままだった。

ミランダはクレアが強姦されたとしか知らないと、マークから聞かされた。

もう、これ以上、迷惑や心配はかけたくないなあとクレアは思った。クレアは医療技術高等学校を5年間通い、卒業した。医師免許を取

得した。

クレアは卒業後、ダンの診療所で研修医として医術を身につけることにしていた。

ミランダはクレアが医療学園都市を去るとき、1時間くらい泣いて抱きしめて離さなかった。

マークは呆れていて、クレアはなかば諦めていたが、タンディン診療所に行くからミランダから解放されるとたかをくくっていた。その後、義父のダンが死亡し、診療所をマーク・テレンスが引き継ぐことなど、クレアはこの時思いもしていなかった。

戦う決意

クレアは医療学校を卒業すると、ダンの診療所ですばらく研修医として、治療していた。

ダンはクレアにマークから事件の詳細を聞いたと言ってきた。

なんとも思っていないといえは嘘になるが、気にしても仕方ないとクレアは嘯ウツクいた。

「初体験は？」

「え?!」

養父が聞く質問じゃないでしょとクレアは言ったが、ダンは真顔で口にした。

「レイプで初めてだったのかと聞いているんだ。」

「初めてじゃないよ。」

クレアは顔を赤くして怒った。

「そっか、良かった。」

ダンは続けざまに聞いてきた。

「聞きたいわけじゃないんだが、知っておいて安心しておきたいんだ。初めてのオトコってどんな奴だったんだ。」

クレアはあからさまに気持ちをうち明けて話すダンに対して、唾然としていた。

少し不憫に思っつて、クレアはすべてをダンに話した。

初めての相手は、山岳救助隊の隊員で、武術習得の本をくれた屈強な男性だった。

好きあつて、セックスしたのではなかった。

大規模な崖崩れの災害が起き救助に向かったが、災害に遭った人々のほとんどの命を救うことができなくて、精神的に辛くなったからだ。

声を上げて泣くことをためらつて、負のエネルギーが体に充満し、はちきれそうなのをこらえている姿をみていて、瘦身なクレアの体

を丈夫で太い腕と分厚い胸板で抱きしめた。

17歳の夏のことだった。

痛みが体を貫いて、クレアは自分が女であることを初めて知り得たような感じを受けた。研修を終えれば、何事もなかったように別れることができたのは、好きあつていかなかったからだろうと、自分の情愛の無さを否定した。

だからというわけでもないが、レイプされたことで、辛いとか苦しむとか、忌み嫌うとかはなかった。

愛玩具のために人身売買された自分の立場というものを理解してしまった少女時代。自由を得た状態でありながらも、どこか自分の体特にオンナとして俗物的なものを求められたら惜しげもなく差し出さなければいけないという思いがあつた。

一種のトラウマになつていられるかもしれない。恐怖するのではなくて、受け入れてしまふ、畏怖^{いふ}するような気持ちにさえなつてしまふ。すべて話を終えて、気にしても仕方ないと言つた自分を嫌になつてしまひ、クレアはダンに抱きついて、泣き叫んだ。

「素直になれとは言わない。俺も素直じゃないからな。抱え込みすぎて吐き出せずにいたら、乱暴な方法で吐き出させることもあるかもしれないから、覚悟しておいたほうがいい。」

その役目が俺だとは限らない。また、お前が誰かの抱えているものを吐き出させるかもしれない。そうやって、お互いの重荷を軽くさせることもあるだろう。」

泣きはらした顔でクレアは言った。

「義父さん、もしかして、ミランダのこと好きだった？」

「ああ。マークと俺はミランダを好きになつた。ミランダが選んだのはマークだった。彼女が幸せになるための選択をしたと俺は安心しているというか納得している。」

ダンの診療室にある本棚にマーガレットの造花が飾られていた。

それをクレアは見つめていた。

「ミランダを失つたというか、俺の中で欠けた部分を埋めるために、

一人の女性を愛そうとした。俺自身と似て、自己表現が下手なオナだった。

間違いに気がついて、お互いに別れるという答えを出した。」

それはダンの元奥さんの話だった。クレアはすこし不安になった。長くはない期間をダンとともに生活していた。そしてこれからはずっとダンと生活していくことになる。この小さな診療所で。

そんなクレアの不安を知ってか知らずか、ダンはスワン村へ行く事に再度挑戦すると言った。

「今、なんて言ったんだよ、レテシア!？」

診療所内に響き渡りそうな大きな声でクレアは叫んだ。

レテシアは顔を赤くしてクレアを見つめていた。

「同じ事を言わせないで。わたしの思い違いだったら、迷惑掛けなくて済む話なの。」

誰に迷惑掛けるんだよと言いたげなのをこらえて、クレアは頭を抱えた。

（あたしのかわいいレテシアが、よりもよって、妊娠だなんて! ?）

クレアが医療学園都市にいてた頃、レテシアがスカイロード上官育成学校で事故に遭い、入院している話を聞きつけて、何度も見舞いにいった。

皇帝がお忍びでレテシアを見舞いに来た話は知っていた。レテシアが退院した後、しばらくは学校を休学していて、スタンドフィールドドックにいてる話は聴いていた。

ドックにいてるということは、もちろん、あのくそ生意気なガキのロブと接する時間が多くなることはわかっていた。ロブがレテシアに惚れているのは知っていたが、15歳だ。

自己表現な下手なガキと認識していたし、ジゼルから恋愛とっへんぼくに関して唐変木だからと聞いていたので、まさかそこまで至ることはあるま

いと思っていた。

クレアは冷静になるよう、自分に言い聞かせた。レテシアに頼まれたように、妊娠検査を始めた。結果は陽性だった。

レテシアは幸せそうに喜んで、生みたいと言った。そして、「どうしてこういうことになったのかなんて、聞かないでね。」と言って、レテシアは釘を刺したつもりだった。

「ジゼルじゃないんだから、どうやって子供ができたかって、聞いたりしないよ。」

ミランダの次に人懐っこさがあるレテシアだが、天然だなんて思いつつ、愛らしい笑顔に気を許してしまう。

クレアは冷静に問診しようとして、最終生理日をレテシアに聞くとした。「どうして？」と聞かれて、苛立ちを感じてしまい、「出産予定日を特定するんだよ。」と声を荒げてしまった。

レテシアは気にせず、素直に答えた。出産予定日は冬だと伝えると、嬉しそうにお腹を撫でるレテシアを見て、クレアは「診療所に超音波の検査ができないから胎児の大きさがわからない」と言った。

知りたければ、大きな病院へいくと良いと言ったが、レテシアは無事に生まれてくれればそれでいいと言った。

どうして妊娠してしまうようなことになってしまったかは想像にしかくもなかった。ただレテシアが幸せそうなので、無理やりってことは無いだろうと考えていた。

レテシアがロブに気があったとは思いつたが、事故後の入院中に何度か見舞いに来て、短い手紙が何通も届いていたのは知っていた。それが功を奏したか、心の傷をロブが埋めたのか。

ロブが診療所にやってきたのは、ロブが腕を骨折したからだだった。ロブに会ってみて、なぜ骨折したのか一目瞭然で理解した。目に青痣、口角には切り傷、上半身を裸にすると下腹部に痣があった。

両腕のすねに痣が無いのは防御をした様子が無いことを意味している。つまりは、暴行されることを良しとして受け入れた姿勢があっ

たということだ。

「ハートランド艦長は容赦しなかった。レテシアが泣き叫んで懇願しても、止めなかったんだ。」

歩くのもやつとだというロブを連れてきたフレッドは、クレアの治療を手伝いながら、言った。

「レテシアが泣き叫ぶくらいじゃ、やめないでしょ。レテシアも悪いつて思ってるんだからさ。」

「ハグハグハ。あ、ガ。」

切れた口でロブは言葉を発しようとしたが、なにを言っているかわからなかった。

代弁するつもりのないフレッドは言った。

「親父に殴られている時は怯えているんだが、艦長に殴られるかもしれないって時には、こいつ、睨み返していたからなあ。」

「喧嘩売ってるって思われても仕方ないな。餓鬼^{がき}なんだよ、自分を痛めつけることでレテシアを守れるわけがない。つてか、ゴメスのおやじさんも殴ったの？」

「ああ、腹を殴ったな。そのあと、レテシアの叫び声とともに、猛烈に走りこんでくる艦長が現れてでだな。」

「まさに恐怖だな。」

というか、親父さんには怯えて、艦長には睨み返すって・・・とクレアが思った瞬間、理解した。ロブの父ゴメスがお腹を殴ったのは、気合を入れさせるためだったと。

レテシアがロブに妊娠したことを伝える時に、クレアは付き添った。間をおいて、ゴメスに話をする時にクレアは立ち会った。

その時のゴメスの表情がクレアには目に焼きついていて、訝^{いぶか}しげな顔から憤怒^{ふんど}の顔になり、ロブを怒鳴りつけた。

「お、お前は、レテシアに気に入られたい一心で、がんばってきたのか。」

周囲にいたものは、一斉にこころのなかで思った。今頃、気がついたのかと。初めて聞かされたときに、ゴメスはその一言だけで言っ

て、何もしなかった。

そして、ロブに背中を向け肩を震わせて、「時間をくれ。」とだけ言った。

ロブが艦長に殴られてから、数日後に、レテシアはスタンドフィールド家の一員になることを認められた。

レテシアは臨月の頃まで、ドックから診療所へ生活する場所を変えた。

ドックにいてると、空を飛べないストレスが溜まってしまっただった。

臨月を迎えて、診療所での出産を望んでいたが、事情が変わった。ダンがスワン村を訪れた後、身重のセシリアを助けたことで預かることになったからだ。

ゴメスの後妻マーサとふたりで医療学園都市のダンの友人である女医のところへむかい、勤務する病院で出産することとなった。

クレアは、ダンとともにセシリアの治療にあたった。

セシリアの素性は皇女殿下だったが、黒衣の民族に誘拐されて亡くなったことになった。

自ら黒衣の民族についていったセシリアは奴隷のように扱われて、黒衣の民族の長の息子の子を身ごもった。

セシリアは薬づけになって子を出産したので、かなり躁鬱の激しい症状が出ていた。

ダンの判断でセシリアの子は死んだことにして、ダンが素性を知る人物に預けた。

クレアは最初から、セシリアの性格が合わないことを承知で一緒に生活していたが、とうとう我慢できずに、追い出したことがあった。ダンはゴメスに相談し、セシリアをドックで預かることになった。クレアはセシリアとロブとレテシアの三角関係を知ることとなったが、我関せずと対岸の火を決め込んでいた。

ロブがセシリアを相手にしないことを知っていたからだだったが、誰

もが予想もしなかった展開がこの後、待っていた。セシリアがフレッドの子を身ごもったことだった。

このことでゴメスが一気に老けてしまったと周囲は口にしていた。クレアとダンにはゴメスに同情するしかできなかった。

セシリアを連れてきたのは、ダンの判断だったし、セシリアの素性を知りながらも、どうすることもできないでいることをダンは後悔し始めていた。

ダンは幾度となく旅に出るといって、診療所をでて、放浪していた。クレアは、自分自身がダンの妻になったような気持ちになり、置いていかれる事を寂しいと感じていた。

ふたりで生活することの気まずさが、自分が大人になることでより一層感じていた。

何を目的に放浪しているのかは、うすうす気がついていたが、そのことでダン自身が命を縮めることになるとは、ダンもクレアも思っても見なかった。

ダンが何かしでかしたりしないかと、自分を置いてほんとうにいなくなってしまうのではないかという不安を抱えるようになり、その吐き出し先をどこへもって行けば良いのかわからなかった。

ゴメスが亡くなり、レテシアがロブと別れてしまい、マーサも亡くなり、周囲は様相を呈して移り変わっていった。

そして、不安要素の原因であるセシリアが事件を起してドックを去った。

ダンは仕方がないことだと思っていたが、かなり心は痛みを感じていた。

レテシアがロブと別れたのは、セシリアが原因ではないかと噂があった。

セシリアがジリアンを虐待したのは、確実に黒衣の民族の子を死んだことに対するフラストレーションだった。

ダンはレインとジリアンが母親を必要とする大事な時期に引き離されてしまうようになったことに心を痛ませた。

セシリアは皇族に引き取られたものの、亡くなったことを公表された事実があるので、皇女として迎えられることはなく、貴族の養女として引き取られた。

後にデューク・ジュニア・デミストとの再会があつて、妻になつた。このとき、セシリアの素性を知るものが誰なのかということにおいて、黒衣の民族の子を出産した情報が漏れていた。

そのことで、ダンは命を狙われた。

新緑の季節、生命の誕生を喜び、幼い子の成長を願い、老いたものをいたわり、生きとし生けるものが芽吹くこと育むこと、生きていくことに感謝できる、季節の変わり目に、診療所でダンは凄惨な死を迎えた。

クレアがダンの代わりに訪問医療を行い、診療所に戻ってきた時のことだった。

診療所は荒らされており、居住区においては血が壁に飛び散っていた。

ダンが血だらけで倒れている姿をみて、クレアは絶叫した。

「義父さん！！！！！！！！！！」

傷だらけの体の上半身を抱えて、クレアはダンの顔を見た。

そこには、予想もしない状態のダンの顔があつた。

凄惨な殺人現場のほずの一室。

部屋中荒らされていて、めちゃくちゃになつていた。

誰もが想像するだろう。ダンが恨みを買ってその人物が復讐するためにダンに壮絶な死を与えたと。

しかし、クレアがみたダンの顔には笑顔があつた。

静かに眠るように口元に血が流れていても笑みを浮かべているような口角が上がっていた。

クレアはダンのその笑顔に、ダイイングメッセージを受け取った。

ダンの切り刻まれた傷に手をあてて感じたのは、傷が深くない。

血しづきは過剰なパフォーマンス、部屋が荒らされているのも。

クレアはすぐさま部屋を出て、警察に連絡すると、診療所の外に立ち、それから一切中に入ろうとしなかった。

事情聴取が終えてもなお、診療所に戻ることはなく、必要最小限のものを持ち出して、行方を晦くもました。

後に警察が発表した事件の真相は、死因が多量出血死で強盗による犯行となったが、その裏では黒衣の民族による犯行だと情報が流れた。

しかし、クレアは真実を知っていた。

ダンの死因は、毒殺でそれは自害だった。

黒衣の民族らしき人物が町をうろついでいて、ダンのことを探していたことは警察が得た聞き込みで判明した。

しかし、そんなあからさまな行動を黒衣の民族がするのだろうか？ 疑問に思った。

警察が発表した死因において、死んだ後に傷をつけられていることぐらいは検死官がわかるはずだとクレアは考えていた。

なぜ、嘘の発表をしなければならなかったのか。あきらかにそこには、黒衣の民族の仕業だと思わせる必要があったのだ。

黒衣の民族の犯行にして何のメリットがあるのかというと、それは黒衣の民族の存在に恐怖させることと、別の意味が含まれていた。

ダンが自分で死ぬ事を決意した理由を突き止めようと、クレアは旅に出た。

クレアは心の奥底で考えていた。おそらくそのことにダンも気づいていたのだらうと思っていた。

（次から次へと、人が殺されていくにちがいない。それは口封じだけのためでもない。）

抗あらがうことのできない暗躍した殺意をクレアは感じていて、それに対して戦う決意をするために、診療所を出たのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4228k/>

グリーンオイルストーリー～空の少年たち～外伝<クレア=ポーター>

2011年1月14日19時42分発行